

19 御室の観音様

伝承地：南大通り1-8-19 (善願寺)

話者：30 参考書籍：9・27・30



(御室観音堂)

宇都宮を代表する古刹である善願寺は「大豆三粒の金仏」で有名であるが、その金仏の南側に小さな御堂がある。

この御堂の下には「御堂の観音様」と呼ばれる仏像が安置されている。

この観音様には次のような話が伝わっている。

平安時代の初め(延暦15年—796—)のことで、蝦夷を討つために派遣された征夷大將軍坂上田村麻呂は、遠征軍を率いて京都を出発し、途中、宇都宮に一泊することになりました。

田村麻呂の本陣を置いた場所は、現在善願寺が建てられている場所でした。田村麻呂はこの地で一夜を明かしたわけですが、その夜、夢枕に自分の守り仏である如意輪観音が現われました。

田村麻呂は、これはこの地に観音様が止まりたいと考えているに違いないと思い、翌朝、草を刈り取りその草を結んで屋根とした庵を作り、自分の大切にしていた観音様を安置して奥州へ兵を進めて行きました。

以後、この観音様は里の人々に「草結び観音」と呼ばれるようになり、初めは深く信仰されましたがだいに人々から忘れられてしまいました。

坂上田村麻呂が観音様を草庵に納めてから約400年の月日が過ぎ、世は源平の争乱が激しさを加えた寿永4年(1185)のことです。

京都の仁和寺の宮、法親王(御室と呼ばれていた)が難を避け、善願寺に隠れ住んでいました。ある時、法親王は池の中に坂上田村麻呂の護持仏であった観音様を見つけました。法親王は、観音様が粗末に扱われているのを嘆き、観音様を石櫃(石で作った箱)に納め地下7尺(約2m)のところに安置してしまいました。

法親王が京都へ帰った後、人々は「草結び観音」を「御室観音」と呼ぶようになり、いつしか安産と学問の仏様として厚く信仰されるようになりました。

しかし、この観音様は一時粗末にされたせいか、お姿を見た人は目がつぶれるといわれ拝むことは固く禁止されていました。ある時、ひそかに石櫃の蓋をあけた者がいましたが、その人は永く眼病をわずらったということです。

昭和20年、石櫃が安置されている開口部が埋められ、その後その上にお堂が建てられ、「御室観音」は永遠に人々の目に触れることがない秘仏になってしまいました。

なお、現在のお堂内の観音様は、「御室観音」に似せて作ったものです。

